

上 澤 謙 二

「保育界の忘れられない人」という題を、編集部から与えられました。

それで考えると、さっそく、頭に浮かんだのが、「倉橋惣三」という名であります。

倉橋先生が、幼児教育者として、幼児心理学者として、いかに深い指導と、ひろい感化を及ぼしたかは、申すまでもありません。大正、昭和期の保育界、保育学界に、先生がおられたこと、または、おられなかったことを考えると、わが国の幼児及幼児教育の世界はちがっていたのではないかとさえ思われるのです。そういう意味において、忘れられない貴い存在だと思っております。

ところで、保育学者としての、心理学者としての倉橋先生を描くのは、ほかに、その人がありましよう。

私は、ここでは、倉橋先生の専門以外の方面にあらわれたところにふれたいと思っております。

それは、先生が詩人であったということです。

先生の文章を読むと、どんな短いものからも、必ず教えられるところ、得るところがありますが、同時に、文章そのものにひきつけられます。「咳唾、珠玉をなす」ということばがありますが、先生の文章は、まさにそれに当たると思われます。感想、随筆はいうに及ばず、論文でも、学説でも、趣きがあり、うるおいがあり、美しさがあります。時には、詩を読んでいるような気持ちにさえなります。これは他の追随しがたい先生独特の境地であると思われまます。

ここらみに、二篇をひきましよう。

「B先生の顔は、見る見る蒼白味を帯びてきた。目には、涙がいっぱいになっている。春子が、いつものズルを出しているのである。B先生は、春子のこの卑しい性癖について、なによりも愛しているのである。どうにかなおしてやりたいと、始終、苦心しているのである。この次こそ、うんと叱ってもみななければならぬ」とも、いつでも思っているのである。けれど、その場になると、目の前に、いつものスルイ性癖を見せつけられ

倉橋惣三先生

ると、叱言（ごご）も、矯正法も、どこへかいつてしまつて、ただ、身が立ちすくむようになるのである。B先生は指先きをふるわせながら、急に、春子の手を握つた。そして無言のまま、裏庭へ連れていった。そこには、大きな古い樹があった。B先生は春子を押しつけるようにして、自分もその樹の根にすわつた。春子はおどろいて目を見張っている。その春子の肩を抱きしめて、B先生は頭を垂れてすすり泣きに泣いた」

（幼稚園雑草より）

「掃き清めて、その一日を待ち受けている幼稚園へ、まず最初の子がにこにこやってくる。『梅一輪一輪ずつのあたたかさ』ふと、こんな古句が思い出される。一人来て、二人来て、だんだんと春めいてくる庭である。ふらりふらりと、あとから来た子。先きに来て遊んでいる子等の、あの群、この群へ誘われて、思い思いのところに、思い思いの春を見つめる。『梅おちこち南すべく北すべく』またこんな古句も思い出される。幾つもの群が出来、だんだん春めいてくる幼稚園の朝である。それにしても、どこからくるこの春の匂いであらう」

（育ての心より）

これは、正に無韻の詩とすべきでしょう。

想うに、先生は天成の詩人であつたでしょう。その方面へ進まれても、嶄然頭角をあらわして、優に一家を成したでしょう。

先生自身「保育者は詩を解さねばならぬ」と、しばしばいわれたように記憶します。

まことに、詩の心の乏しい、芸術に縁の遠いものは、理想的な保育者とはいえないでしょう。なんとすれば、幼児は詩的であり、芸術的だからです。しかも、その傾向は伸ばされねばならないからです。

倉橋先生は学者であり、教育者でありました。しかしさらに詩人でありました。